

ソ連知識人と中国知識人

中嶋 嶺 雄

ソ連の代表的な反体制知識人アンドレイ・サハロフとアレクサンドル・ソルジェニツインが昨年八月、ソ連社会内部での知的自由と民主化を欠如したまま進められている緊張緩和政策の危険な欺瞞性について、厳しい抑圧に抗しつつもこれを訴えたとき、西側諸国の多くの知識人や政治家は、このアピールに広く共感し、声援をおくり、あるいはブレジネフ政権に対する抗議の意志さえも表明した。社会主義諸国の内政上の諸問題については、とかく遠慮しがちなわが国の知的雰囲気の中にも、サハロフやソルジェニツインの立場にたいする共感も存在しているといつてよい。一部の論者は、このような問題が表面化するたびに中ソ両国における知的自由の欠如を社会主義諸国に共通の恐るべき病像として描きあげる。たしかに、内政上の民主主義が欠如しているかぎり、その対外政策がきわめて危険の多いものにならざるを得ないことは、近代政治史が教えるところであり、E・レーダーは、この点を、「理性に反し、文明を破壊し、必ず情緒をかきたてる」近代独裁制について分析したとき、「諸概念が外交政策に翻訳され、情緒が溝条化されて、「敵」に向けられている。「大衆の国家」と述べている。レー

ダーの分析対象は周知のようにナチス・ドイツであり、あるいはスターリン主義のソ連であったが、今日の社会主義においても、知的自由と民主化の欠如が内部で継続するかぎり、たてまえとしてのインタナショナルイズムは狭隘なナショナルイズムに転化し、ナショナルイズムはジョービニズムへと墮落する。

だが、それにしても、知的自由と民主化の問題を中ソ両国一様に同質の問題として考えることは、あまりにも空々しい暴論である。たしかに、ソ連における収容所や精神病院は恐るべき事実であろう。にもかかわらず、サハロフやソルジェニツインは、国内的な孤立に抗して、そのアピールをソ連内部での西側記者との会見で堂々と表明することができたし、彼らのアピールは外部世界に伝達されたのである。そしてサハロフもソルジェニツインも、今日なお健在である。では、中国の反体制知識人にそのようなことが可能であろうか。われわれは、この差異を決して無視してはならない、と思う。そして、文革期中国の社会主義学院には、およそ五百人も知識人が強制収容されていたことも忘れてはならない。しかも、彼らは、老舎のように、抗議の自殺を選ぶか、丁玲のように辺境の農村で果てる

かの道を除いては、「反党・反社会主義・反毛沢東思想」のレッテルによるたえまな洪水のような糾弾と大衆からの孤立感、勧善懲悪的な倫理・道徳主義的教化のままで、「面従腹背に徹するか」、「自己改造」するかの道しかないのである。もとより、中国の場合、ひとたび批判され、失脚した知識人であっても、政治情勢の変化のなかで復権する者もある。近くは、孔子批判に関連して、「尊孔」の立場を、「自己批判」した哲学史界の大御所・馮友蘭がそうであり、去る十一月には、文革期に激しく批判され、國務院文化部長を解任された作家・茅盾が復権している。また、特筆すべきこととしては、七三年春の費孝通の復権が挙げられる。費孝通はデュエーイの影響を受けた世界的にも著名な社会学者であり、民主諸党派の知識人として衆望をにない、五七年の「百花齊放・百家争鳴」の時期には、胡風批判以来の中国知識人の貝殻のような沈黙をやぶって「知識分子の早春の天気」と題する論文を「人民日報」(五七年三月二十四日)に発表し、「百花齊放・百家争鳴」という中国共産党の呼びかけにもかかわらず知識人がなぜ逡巡せざるを得ないのかを印象深く語った人物であった。だが、やがて反右派闘争に出会うと「陰謀グループ」、「章羅同盟」の一員として激しく非難され、中国にプラグマティズムをひろめようとした、「ブルジョア科学」である社会学の講座を北京大学に復活させようとした、ブルジョア的な方法で農村調査をおこなった、等々の罪状が激しく糾弾されたまま、なんと十五年間も消息を断つていた知識人であった。

日本文化会議・談話室ご案内

千代田区紀尾井町・文芸春秋ビル9階・264-6069

日本文化会議・談話室には、右の海外新聞と雑誌が常備されておりますから御利用下さい。(ご利用時間は平日は10時～5時まで、土曜日は10時～12時まで)

- 外国新聞
 - (American) The Christian Science Monitor (daily) The New York Times (daily & Sunday)
 - (British) The Observer (weekly) The Times (daily) The Times Literary Supplement (weekly)
 - (French) Le Monde (daily) Le Figaro (weekly)
 - (German) Die Zeit (weekly)
 - (香港) 星島日報
- 外国雑誌
 - (American) Fortune (monthly) The Nation (weekly) Foreign Affairs (quarterly)
 - (British) The Economist (weekly) Encounter (monthly)
 - (French) L'Express (weekly) Le Nouvel Observateur (weekly) Esprit (monthly)
 - (German) Der Spiegel (weekly)

随

想

姿を消した知識人の十五年ぶりの復権——たしかに、これはソ連社会には例を見ない中国的な現象であるのかもしれない。しかし、復権した知識人は、あるいは名目的な復権であり、あるいは政治的要請による復権であり、大げさな身振りですんでするための復権なのであって、いずれにせよ、知的自由と民主化の課題と

私は、昨年の夏、生まれてはじめてヨーロッパなるところをひとまわりしてきて、仕事と余暇をかねた一人旅なので、ついでに家内をつれて、まったく気ままな珍道中をやつてきた。たつた二十日間ほどの短い旅だったが、その印象は強烈で、ややオーバーな言い方をすれば、私の人生観まで変つたというほどのものがあった。おそらく、今後たびたび行つていけるうちに、印象も稀薄になり、そのうちには何も感じなくなるのだらう。そういう意味からも忘れないうちに、このおそらく誤解と偏見に満ち満ちた、きわめて皮相的で独断的な印象を、あえて記録にとめておくことは、意味があると思つた。客観的にいかに独断的であらうとも、本人は、「百聞は一見にしかず」という新鮮で強烈な感慨をもつたことは

は、あまりにも隔絶した状況のなかでのドラマなのである。この冷徹な事実につけ加えることがあるとすれば、中国知識人の明日に向つて「耐える思想」の根強さこそ、ソ連知識人とは異なる伝統的な特質であることを忘れてはならないことぐらいであらう。軽佻浮薄な日本知識人は、いかんせん啊！

(東京外国語大学助教授)

飽 戸 弘

事実であつたのだから。

まずロンドンで、もつとも印象に残つてゐるのは、タクシーの運転手だつた。彼らは、ほとんど例外なく、たとえ背広は着古したものであつても、Yシャツは洗いざらしであつても、キチンとネクタイをしめ、帽子をかぶり、タクシードライバーという誇りを身体全体から発散させていた。日本のようなシガナイ運ちゃんとか、お上りさんをたぶらかす雲助タクシーといったイメージとは似ても似つかないものだつた。ステークハウスの老ボーイはチップをもらつたときに、パリやローマの安ホテルのボーイさんのように、かん高い声で「キュー」というのではなく、ドスのきいた小さな声で、「サンキュー、ベリマツチ、サー」と言つたものだ。音楽会や劇場も、日本のように、

ハイティーンを中心とする若者たちだけのたまり場といった感じはまったくなく、中年以上の夫婦や老夫婦たちが、正装して、余暇を楽しんでいた。若者たちは、親のスネなどかじらずに、自分たちの力で一生懸命働き、中年以後になつてレジャーを楽しむのだと、現地の人は語つてくれた。そこには伝統の重みが、しみじみと感じられた。

それとは対照的に、街かどでみる若い女性たちの服装は、目をみはるほど斬新で、大胆で、というよりはむしろ珍奇というに近いものであつた。フランスやローマの落ちついたシツクなおしゃれに比して、ロンドンのおしゃれは、桁はずれに珍奇で、個性的なものであつた。そこには、重い伝統への若者たちの挑戦が、そのような形ではじまつているという印象を強く感じたものだつた。

パリは、期待が大きすぎたためもあるが、失望の連続であつた。「リド」もシャンゼリゼの商店街も、観光バスも、世界の田舎つべを相手に稼ぎまくつてゐる、という感じであつた。パリの裏通りには、「日本のみなさん歓迎します」という看板が並び、レストランでは、ジェラールフイリップと見まがうばかりの青年に、「ピフテキあるよ」「オニオンスープあるよ」と日本語で話しかけられたときには、百年の恋もさめる思いだつた。わずかにモンマルトルの丘のぼり、街頭絵かきの絵をみながら、曲りくねつたひなびた石だたみをおりてきたときは、これが観光に毒される前の本当のパリなんだらうと、心なごんだものだつた。イタリーは、ミラノ、フイレンツェ、ローマと、馳け足であつたが、汽車の時

間のデタラメなものと、東京に負けず劣らずの雲助タクシーと、商店やレストラン、銀行などの営業時間の短いのと、商売気のないのがやたら印象に残つてゐる。と同時に、すばらしい遺跡や、なげなくあちこちに散在する重厚な大理石の建物、荘厳な寺院や教会、ステンドグラスにモザイクの壁画など、息もつけないうほどの感動の連続でもあつた。

ヨーロッパでの共通の印象は、伝統の重みと、人々ののどかさという二つの点であつた。

イギリスのウインザー城、ウエストミンスター寺院とビッグベン、フランスのベルサイユ宮殿、ルーヴルにノートルダム寺院、イタリーではヴァチカンのセントピーター大寺院、そして古代ローマの数々の遺跡は、ヨーロッパの伝統の偉大さをそのまま物語つていた。

そして彼らは、そのような伝統を、誇りをもつて、慎重に保存している。科学技術がいくら進歩しても、科学はこれらの伝統に挑戦することはできない。いくらアメリカ人が、日本人が、あくせく働いても、古代ローマの遺跡を造り出すことは出来ない。そこには、底抜けに楽天的なあきらめがある。人間がすこし位じたばたしても、どうなるものでもない、時間の経過という絶対的なあるものがある。ヨーロッパ人がのんびりしているのは、このような伝統の重みを知っているからではないかと、そんな気がした。店へ入つてものを買えば、おつりがなかなか計算できない。他国のお金などつかおうものなら、いつになつたら換算できるかわからない。レストランへ入れば、注文は一回に一つか二つしか覚えられない